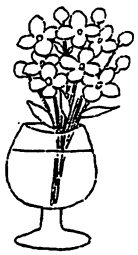
で苦しそうな形相で死んでいました。その時分は、ふいに音がすると百雷が落ちるがごとく、爆撃機が飛んでくることがあったのです。きっと、隠れるチャンスを失った人なんでしょう。

私も一度、もうすぐ片町駅に着く寸前にバリバリという音を聞きドアが開いた途端、腰が抜け、気が付くと皆がゾロゾロとはい出て、それぞれ列車の下や鉄道荷物の陰とかに隠れてしゃがみ込んでいました。運転手がどこへ行ったか分からず、何時間も列車は動きませんでした。

京橋駅が爆撃されたときは、死体の山に焼けたトタンを被せて数日そのままでした。線路はアメのように曲がっていました。また、ある日は、馬が倒れ、馬方が真っ青な顔で座り込んでいました。さらに、片町駅近くの倉の前で男の人がぶどう色にバンバン腫れあがって倒れ、蛆虫（うじむし）が出たり、入ったりしている光景を見ました。でも、明日は我が身かもと思っていたので、お気の毒に、との感慨しかわきませんでした。思えば、本当に恐ろしいことです。

食料もますます無くなり、これも忘れられない一つの思い出です。雨のシトシト降る日、小さな庭のグミの木に絡まっているナンキンの蔓（つる）をたぐって「腹へった」と泣いている兄。可愛い孫がひもじがる姿を見なければならなかったお祖母さんの気持、どんなに辛かったことでしょう。今、自分が孫を持つようになり、痛切に胸が痛みます。自分の孫が…と思うだけでも慄然としてきます。

母は、長時間並んでやっと手に入れたサバをカンテキで焼いていました。そのサバから、蛆虫がポトポト落ちます。この魚を母が食べるのを見ました。

もう二度と戦争は嫌です。ここに書き尽くせない悲惨な出来事が一杯ありました。心の底から平和を願ってやまない一人です。